



世界威物傳

Vol.1b オリンピック

IOCはFIFAワールドカップも仕切っていることをご存知だろうか。FIFAは法的には独立法人だが完全にIOC傘下にある。これがオリンピックとワールドカップの手口が酷似している理由。どちらも開催地に経済的な大打撃を与える。どちらも儲かるのは主催者だけだ。いや、もうひとつ儲かる業界があった。開催地に大挙して押し寄せる夜の蝶のお嬢様方。およそ3万人と推定されている。各国入管は防衛に必死のようだが、彼女たちはきちんと仕事をして稼いでいるわけでIOCより「実業」である。

さて、非営利団体NPOであるIOCは持て余すほどの収入をどのように消化しているのだろうか。NPOは非営利なので儲けを出してはいけない。収入を何かに投資したり溜め込んでもいけない。だから合法的に使いまくっているのだろうが、ケイマン諸島あたりには、...

片やオリンピック貧乏、片や使い尽くせないほどの金。それでもオリンピックは続く。

しかし近年、立候補都市が激減している。当たり前だ。オリンピック開催の名誉より代償があまりに大きすぎ、IOCの横暴にも嫌気が差して知的な自治体は関わろうとしない。実際、東京開催の後の候補地が少なすぎ、あわてたIOCは次回開催地と次々回開催地を先回りして決めてしまった（通常決めるのは次回だけ）。

今、「やります」と勢いよく手を挙げる都市（国）にはスポーツ以外に何らかの狙いがある。ヒトラーのベルリン大会のようなもので国威高揚や体制引き締め、あるいは「我が国はオリンピックができるほどの一流国です」というアピール。2022年の北京では習主席の元、チベット族ウィグル族を含むすべての民族が美しく調

和し、仲良く豊かに暮らしている様が見えるだろう。そういう宣伝費としてなら巨額支出も安いもの。なお、北京の対抗馬はカザフだった。

オリンピックが重要視されるのは4年に一度というレア感と世界最高峰というブランドイメージがあるからだ。もし日本が「IOCは悪辣だから」と不参加・非協力を決めたら、国内スポーツ団体や競技者、一般国民までが激怒するだろう。どの国もオリンピックから降りられないところにIOCの驕りの源泉がある。

驕りを保つには金メダルの価値を下げてはいけない。しかし近年、無視できないライバルが現れた。X Gamesだ。競技者の中にはオリンピックの金メダルよりX Gamesのメダルを欲しがることが多くなり始めている。IOCにとっては由々しき事態。IOCは早速対応した。なんとX Gamesの人気種目を、横暴というか稚拙というか、そのままオリンピック種目に加えたのだ。主導権を取りたいのはみえみえ。

オリンピックにスケボー？ BMX？ クライミング？ サーフィン？ もちろんどの種目も立派なスポーツだが、いきなり加わった唐突感には否めない。冬季五輪にもX games由来の種目は沢山ある。さて、オリンピックとX games、どちらのメダルが重いのか。

反面、そもそもオリンピックのメダルが重くはならない競技は排斥される。たとえば野球。金メダルよりワールドシリーズの方がどうやっても上だし、もしかすると日本シリーズだって上かもしれない。そして2006年にWBCが始まると2008年の北京を最後に競技種目から外され、WBCがパツとしないと見るや2020年の東京で復活。これ、偶然だろうか。